

播州高原の蝶類について

西村 公 夫

On the Butterflies in Banshu plateau

By Nishimura Kimio

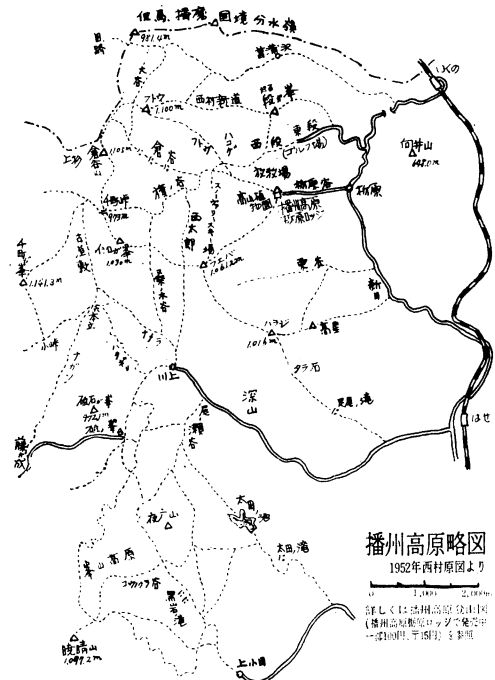
I. 概 説

私は播州高原の動植物について、これ迄十数年に亙り研究してきたが、そのうち蝶類に関する調査は殆んど完成したので、ここにまとめてみた。播州高原とは中国山地の東端に当る兵庫県の中中部、即ち旧播磨国の東北部に位置する神崎郡と宍粟郡と朝来郡にまたがる一小山塊で、その北端は但馬に接して分水嶺をなしている。ここには千町が峯(1,141.3m)をはじめ、倉谷山(1,105m)、フトウ(1,100m)、段が峯(912.7m)、フェバ(1,061.2m)暁晴山(1,077.2m)、夜鷹山(1,050m)などが連なり、この南北に走る山地をはさんで、東は市川に、西は揖保川にそそいでいる。この地域は中国山地にあつては随分南に偏して内陸であるため、空気はよく乾燥し、雨少なく、晴天日数が比較的多い。栃原ロッジ(400m)において測定した年平均気温は11.7°Cで、寒暖の差は可成り激しい。温量指数は93、寒冷指数は-14となっている。播州高原は僅か1,000mそこそこの低山にしかすぎないが、京阪神に最も近い東部山陽地方の蝶類相を呈した典型であること、ウスイロヒョウモンモドキの多産地であること、兵庫県下の珍種、新記録種の数々の発見地であることなどにより、特に栃原谷は兵庫県随一の採集地として名高い。

中国山地は大きく分けて次の5つの分布型に区分される。①山陰型、②東部地地型、③中部山地型、④西部山地型、⑤山陽低地型(山陰低地と共通点が多い)、これらは未発表の私の持論であるが、何れも加古川、舞鶴線(文献7)によって終止符を打つ。播州高原は第二番目の東部山地型に属するわけであるが、標高600m弱においてカン帯はブナ帯と入れかわる。中部および西部に比して山陽色が乏しいのは前二者の高原が700m以上1,000mに達しているのに対し、東部は500~600mにすぎないから根本的に環境が違っているのと地史的な場合とが考えられる。その特徴として中部以西に分布するヒメシジミ、ゴマシジミ、ムモンアカシジミ、ヒメシロチョウ等は東部で未発見であること、また中部以西では普通種であるダイセンシジミ、オナガシジミ、ジョウザンミドリ、ミヤマカラスシジミ、ホシミスジ、ヒョウモンモドキ、キマダラモドキ、オオヒカゲなどは東部においては

稀な種類(地域によるが)であることなどで、これは蝶類とは切っても切れぬ関係にあるフロアにおいてもいえることである。また、山陰側と山陽側の垂直分布の相異(例えばブナ帯とカン帯の接点は山陰側で450m、山陽側は600mで、背築地帯が北に偏するにつれてその差は相い接近している。)は緯度に関係なく気候の相違による日照時間の違いによるのである。

播州高原の蝶類についてまとめられたのは、これまでに段が峯山塊の昆虫に就いて(西村公夫/1952)があるだけである。兵庫県産蝶類目録(山本広一、吉阪道雄/1958~1960)には前の文献が充分に引用されていないようで、いくつかの重要な記録が欠けているから、前の文献の訂正と追補をも兼ねておこうと思う。最後に常々私の研究に対してご教示並びにご協力をいただいた吉阪道雄氏に深く感謝の意を表する。



II. 凡 例

① ここにおける地域の区分は一切行政地名を使用せず、単に栃原谷、倉谷、千町峠、川上、晩晴山などと、その地方で最も広く使用されている呼称を用いたので、詳しい地点は付図を参照していただきたい。

② 垂直的な区分は、中国地方においては500~600m以下を平地と丘陵地帯、500~1,700mのブナ帯を低山地帯という常識的な学説に基づいて行なった。しばしば他の記事で学術的根拠がなしに、高地とか低地、寒地とか暖地という言葉がでたらめに使用されているのが不服である。中国山地においては大山の頂上付近のある部分を除いては、また、播州高原は勿論のこと兵庫県下においても高地と思われる部分は存在しないからである。私はここでは常緑樹とミズナラなどの混淆地帯の平均（蝶類の場合はブナ帯をもって区別するより、その方が都合がよいから）をとって500m以下を低地、それ以上を山地と呼ぶことにした。

③ 播州高原で私が採集した蝶類の標本はほとんど栃原ロッジに保存している。

III. 主な採集地とそのコース

1. 栃原谷周辺 生野駅の西方約4kmの地点にある栃原ロッジを中心とする一帯がこの地方随一の好採集地。従来主要コースであった段が峯山麓の西段はゴルフ場になってしまっていて往年の姿はいまはないが、蝶の採集、分布にはほとんど影響はない。

④ 栃原ロッジ—旗ノ谷—西段—栃原ロッジ(4km)、主なもの、オオウラギンヒョウモン、スミナガン、オオムラサキ、ウスイロヒョウモンモドキ、シータテハ、ミスジチョウ、アサマイチモンジ、ホンチャバネセセリ、アオパセセリ、スジグロチャバネセセリ、ミヤマカラスアゲハ、オナガアゲハ、ギフチョウ、ウラゴマダラシジミ、クロンジミ、ダイセンシジミ、ウラクロンジミ、ウラキンシジミ、メスアカミドリシジミ、エゾミドリシジミゲ、ヒメヒカゲなど播州高原の蝶類の主なもののほとんど全部はこの付近で採集できる。特に倉谷出合から西太郎付近が重要なポイント。

⑤ 栃原ロッジ—倉谷—倉谷山—千町峠—栃原ロッジ(10km)、主なもの、ウラクロンジミ、ウラキンシジミ、メスアカミドリ、エゾミドリ、ジョウザンミドリ、アイノミドリ、ウスイロオナガ、コムラサキ、シータテハ、ヒメキマダラヒカゲ、ギンイチモンジセセリ、コキマダラセセリなど、特に千町峠、上杉付近はミドリシジミ類の採集には最も重要な地域。

⑥ 栃原ロッジ—ナガサコーフェーバー—川上越—西太郎—栃原ロッジ(6.5km)、主なもの、ミドリシジミ、エゾミドリ、ジョウザンミドリ、メスアカミドリ、アイノミ

ドリ、ウラキンシジミ、シータテハ、アサギマダラなど、このコースは急坂なため、普通は西太郎を往復するのが楽である。

⑦ 栃原—栗谷—新田放牧場—長谷(8km)、主なもの、アサギマダラ、ミヤマカラスアゲハ、アカシジミ、オオミドリシジミ、クロンジミ、ホンチャバネ、ウラナミジャノメなど。

2. 峰山および砥ノ峯周辺 砥ノ峯の登山口の川上へは寺前または長谷よりバスがあるが、途中の犬見川沿いの深山付近は、なかなか見逃せない好採集地である。上小田へは寺前よりバスがある。

⑧ 川上—ナガソー—砥ノ峯—川上(7km)、主なもの、シータテハ、コムラサキ、ウスイロヒョウモンモドキ、テングチョウ、ヒメヒカゲ、ヒメキマダラヒカゲ、コキマダラセセリ、スジグロチャバネセセリ、ミドリシジミ、ミヤマカラスアゲハなど、川上から長瀬へ入るにはナメラとハタギリのルートがあるが後者の方が眺めがよい。ナガソは栃原谷、千町峠方面を結ぶ要路で、砥ノ峯の合流点付近(藤ガ成)は栃原谷に匹敵する好採集地である。

⑨ 川上—砥ノ峯—晩晴山—上小田または、その逆コース。主なもの、スミナガン、コムラサキ、ツマグロヒョウモン、ウスイロヒョウモンモドキ、ヒョウモンモドキ、ウラギンヒョウモン、ヒメヒカゲ、ヒメキマダラヒカゲ、コキマダラセセリ、アオパセセリ、ミドリシジミ、メスアカミドリシジミなど。峰山高原は栃原谷方面に比して樹木が乏しく、植生も単純だから砥ノ峯付近を除いてはほとんど採集には意味がない。また、太田の池へのコースをとる場合は峰山から行くルートと、尾ノ瀬谷から入るルートがある。

IV. 研究のポイント

1. ギンイチモンジセセリとホンチャバネセセリの発生回数について

ギンイチモンジは普通近畿、中国では年2化であることはよく知られているが、私がここでは1化であることを知ったのは1954年7月10日に倉谷山頂上で採集してからである。ここは標高1,000m以上の地点だから当然のことと思っていたが、その後650mおよび900mぐらいの地点でも6~7月に採集してから他の産地と比較してみた。低地では稀れに2化、すなわち近畿の平地では4月下旬~5月中旬に、鳥取および岡山の丘陵地帯から800mまでの山地では5月上旬~6月上旬に第1化、8月に第2化(山地では稀れに2化)が発生するが、播州高原のそれは同一標高においても1化の上には発生がみられるのは地域差によるものだろうか。ホンチャバネについては、すでに中国山地の低地では2化することが判つてい

た。(文献5) 栃原谷の棲息地は標高300~600mの比較的極限された地域で第1化が6月10日頃から7月25日、第2化は8月10日から9月20日頃の間に出現する。鳥取県の低地においても同様であるが、広島県の西部山地(700~800m)で知られる記録は何れも7月中旬~8月中旬で、明らかに年1化である。この違いは標高差による気候の違いによるものだが、どの辺で1化と2化の線が引けるものか、それとも単に地域差によるものだろうか研究の必要がある。

ところでこの2種を比較してみると面白い。ホンチャパネ1化地帯の近くでなおギンイチモンジが2化し、ギンイチモンジが当然2化すると思われる低い地点で1化しかししないのに、ホンチャパネは2化している事実である。単に標高差や気候の違いだけではなさそうである。播州高原では800m以上の地点でホンチャパネが未発見であるだけに、なおさら複雑な問題である。

2. なぜウスバシロチョウが棲息しないか

中国山地背稜地帯の標高180mくらいから上のほとんどの地域に普通に棲息しているウスバシロチョウは播州高原に限っていないのである。殊にムラサキケマンの多く自生する渓谷地帯に沿った伐採地跡や河原などに群飛するのに、栃原や川上などの絶好の環境でさえもないのである。面白いことに同じ山系の前山にしかすぎない神子畑や雪彦山にはちゃんと棲息しているのである。今まで栃原谷で1962年5月中旬に1回目撃しただけ。飛翔力、移動性の強い蝶のことだから、おそらくどこからか風に乗ってきたものと思われるが、この山塊のどこかにきつと、この白衣の乙女たちの楽園があって、いつかはめぐり会えるかも知れない。

3. ゼフィルスの垂直分布

ミドリシジミ類の仲間を一般に使いなれた旧属名が捨て切れずゼフィルス(Zephyrus)と呼んでいるが、蝶類研究家の間では最も人気がある。この分布については山本、吉阪両氏の報告(文献20/1959)による垂直分布(ここでは一世代に互る棲息地)と私の調査研究とは若干意見を異にしているので簡単に説明しておこう。ゼフィルスの大部分はブナ科植物の若芽を食餌としているので、その分布から考えてみよう。その多くはミズナラ(モンゴリナラおよびミヤマナラを含む)(ミズイロオナガ、ウスイロオナガ、オオミドリ、エゾミドリ、ジョウザンミドリ、アイノミドリ)、コナラ(アカシジミ、ミズイロ、オオミドリ、ダイセンシジミ)、カシワ(アカシジミ、ウスイロ、ダイセンシジ)、ミクスギおよびアベマキ(アカシジミ類4種、ミズイロ、ウスイロ、ダイセンシジミ、オオミドリ、クロミドリ)、ナラガンワ(ヒロオビミドリ、ウラジロミドリ、ミズイロ、ウスイ

ロ、オオミドリ)などを食し、一部のものがオオバイボタ(ウラゴマダラ)、マルバアオダモおよびトネリコ(ウラキンシジミ)、マンサク(ウラクロシジミ)、サクラ類(メスアカミドリ)、ブナ(フジミドリ)、ハンノキ類(ミドリシジミ)、アカガシ、ウラジロガシ(キリシマミドリ)などである。このうち最も主要なミズナラはブナとともに温帯(低山帯)の標示植物であるが、この両者の分布を比較してみると、ミズナラは温帯南部から暖帯北部において完全に常緑カン類と混生するが、ブナはより高いところでないと現われない。ところが上限をよく調べてみると両者はほとんど前後してなくなる。(ブナは飛驒山脈南部では1,650m付近が上限で、北にゆくにつれて高くなり、穂高岳付近で部分的には亜高山帯下部にまで侵入して1,600~1,800mの間でソウシカンバ、シラビソ、オオシラビソなどと混濁し、白馬岳付近では、さらに高く1,900mに及び、特に大遠見では2,100mに達している。ミズナラは普通はほぼブナと同じ高さまで達し、近似のミヤマナラは亜高山帯中部に達している)すなわち問題はフジミドリ、ジョウザン、アイノミドリの上限はほぼ同一であるが、その下の限界が違うということである。植物の分布だけ見ているとフジミドリが一ばん山地性のように見えるが、他の種類もちゃんと自分の棲みやすいところを知っていて、いくらミズナラが暖帯まで降りていても蝶はいないのである。フジミドリは垂直分布が一ばん狭いというだけのことだ。温帯性の蝶でエゾミドリは最も広く、これは陽性である。ジョウザンミドリとオオミドリはミヤマナラとともに、さらに高いところまで達している。アイノミドリはジョウザンと下限を同じくしているが、むしろ環境に順応性のあるジョウザンの方が高地性である。ゼフィルスの産地として高名な大山においては1,000mくらいの高さで多産するのでジョウザンより一見高地性のように見えるが、これは両者の棲息環境が違うからで、アイノミドリは暗い谷間を好むのに対して、ジョウザンは比較的場所を選ばず、朝夕の活動中にアイノより薄暗い林の中や明るい草原地帯に現われるかと思えば1,500mを越える稜線でも堂々と生活している。もう一つ面白いことは、ジョウザンミドリの多い山ほど寒地性である。ジョウザンがいないか、あるいは少なくともエゾやアイノの多い山がある。高い山ほどジョウザンが多く、その場合は相当低いところへでも降りてくる。いくらミズナラが豊富でエゾやアイノがいてもジョウザンはある程度山の高さがないと棲息していないのである。大山にはジョウザンが多産するが、同じ中国山地でも他の山々には少ない。また、メスアカミドリは食樹について上は亜高山帯から、下は産地では暖帯北部まで降りてくる。ミドリシジミも平地から亜高山帯まで達し、メスアカミドリより

一そう巾が広い。ウスイロオナガ、ミズイロオナガ、アカシジミ、ウラクロ、ウラキン、ウラゴマダラは暖帯南部から温帯中部まで、ヒサマツミドリとキリシマは暖帯に限られ、ダイセンシジミは暖地性で巾が狭く、暖帯北部から温帯中部までで、温帯中部以上には達しない。

結論としては最も高所に達しているのはメスアカミドリ、ミドリシジミ、ジョウザンミドリ、オオミドリの4種、次いでフジミドリ、そしてアイノミドリ、エゾミドリ、ウラキン、ウスイロオナガの順である。また、最もその下限の高いのがジョウザンミドリ、次いでフジミドリ（フジミドリは垂直的にはジョウザンと同じくらいだが、水平的には遙かに広く、九州南部まで達している）。アイノミドリとエゾミドリ、そしてメスアカミドリという順である。

4. 今後発見される可能性のある蝶類

ヒサマツミドリシジミ（倉谷一ノ滝および千町峠で目撃）、フジミドリシジミ（倉谷山頂上直下で目撃、まだ食樹のブナが若干残っている）、スギタニルリシジミ（食樹のトチノキは山地へ入れればあちこちに見かけるが……、関西では比較的深山の蝶とされているが、実は低山帯のもの、播州高原最南端の雪彦山でとれている）、オナガシジミ（クルマの自生地には大抵見つかるであろう）、また、もっと低地を念入りにさがせばホンミスジ、ウラナミアカシジミは必ず見付かるであろう。その他淡い希望を持っているものにキマダラルリツバメとオオミスジ（何れも近くでは福知山でとれている）、キマラモドキ（中部中国山地に普通）がある。現在までに播州高原中心地帯で採集された蝶類は9科、99種であるが、近いうちに100種を越えることは間違いない。

V. 各 論

A. セセリチョウ科 Family Hesperidae

1. ミヤマセセリ *Erynnis montanus* Bremer

4月下旬～6月上旬、年1化、普通。

2. ダイミョウセセリ *Daimio tethys daiseni* Riley

5月中旬～8月中旬、年2化普通。1962年前翅の斑紋の一部を消失したものを採集した。

3. アオバセセリ

Chaospes benjaminii japonica Murray

5月中旬～6月上旬、8月上旬～9月下旬、年2化、普通。

4. ホンチャバネセセリ

Aeromachus inachus Ménétrière

6月中旬～7月下旬、8月中旬～9月中旬、年2化普通。14. VIII/1950、3♂、1♀が最初の発見、特に栃原ロッジ付近に多い。

5. スジグロチャバネセセリ

Thymelicus leoninus Butler

7月上旬～8月中旬、年1化、多い。14. VIII/1950、2♀を採集したのが最初の発見、高原の蝶として紹介されているが、栃原谷や川上の400～600mの溪流に沿った草地や道端でその美しい姿をよく見かける。棲息地は局地的だが個体数は多い。

6. ヘリグロチャバネセセリ

Thymelicus sylvaticus Bremer

7月上旬～8月上旬、年1化、少ない。前種に比して分布は広いが数は多くない。両種は混棲するが、発生のはじめは前種の方がやや早く、最盛期は本種の方が先に来る。つまり出現期間は本種の方が短いことになる。26. VII/1951、1♂が最初の発見。

7. コキマダラセセリ

Ochlodes venata herculea Butler

6月下旬～8月上旬、年1化、普通。黄褐色の美しい中型セセリで代表的な高原の蝶である。中国山地や中部地方では極めて普通種である。栃原ロッジ付近では6月下旬に、暁晴山では7月上旬、倉谷山頂上では7月中旬から出現する。朝夕湿原のお花畑や、また、地面の水湿に群がる様子は、実に素晴らしい。29. VI/1951、2♂を西段で採集したのが最初の発見。

8. ヒメキマダラセセリ

Ochlodes ochracea rikuchina Butler

6月上旬～7月下旬、8月中旬～9月上旬、年2化、普通。前種に似るが小型で性質は極めて陰性である。

9. キマダラセセリ *Potanthus flavum* Murray

6月、7月中旬～8月上旬、年2化、第1化は少なく、第2化は多い。

10. ギンイチモンジセセリ

Leptalina unicolor Bremer et Grey

6月上旬～7月中旬、年1化、多い。参考資料、倉谷山3♂、10. VII/1954、暁晴山7♂、1♀、16. VI/1958、4♂、3. VII/1959、倉谷山4♂、14. VI/1961、西段1♀、27. VI/1963、全部春型。

11. コチャバネセセリ

Thoressa varia varia Murray

5～9月、年2化、普通。

12. オオチャバネセセリ

Polytemis pellucida Murray

6～8月、年2化、普通。

13. ミヤマチャバネセセリ

Pelopidas jansonis Butler

4月下旬～5月下旬、7月下旬～8月中旬、年2化、第1化は稀、第2化は普通。

14. イチモンジセセリ

Parnara guttata Bremer et Grey

6月～10月、年3化くらい、普通。

15. チャバネセセリ

Pelopidas mathias oberthüri Evans

8月、年1化、稀。栃原ロッジ1♀、17.Ⅷ/1962。

16. ホソバセセリ

Isotheon lamprospilus Felder et Felder

7月中旬～8月上旬、年1化、普通。

B. アゲハチョウ科 Family Papilionidae

17. アオスジアゲハ

Graphium sarpedon nipponum Fruhstorfer

6月、8月、年2化、稀。1♀、12.Ⅷ/1952。

18. キアゲハ

Papilio machaon hippocrates Felder et Felder

4月下旬～6月上旬、7月上旬～8月中旬、年2化、少ない。

19. アゲハ *Papilio xuthus xuthus* L.

4月下旬～5月中旬、7～8月、多くない。栃原ロッジ1♂、14.V/1961。

20. クロアゲハ

Papilio protenor demetrius Cramer

5月中旬～7月中旬、8月上旬～9月中旬、年2～3化、普通。

21. モンキアゲハ

Papilio helenus nicconicolens Butler

5月、8月、年2化、たいへん稀。

22. オナガアゲハ *Papilio macilentus* Janson

5月中旬～7月下旬、8月中旬～9月中旬、年2化、普通。

23. カラスアゲハ

Papilio bianor dehaanii Felder et Felder

5月中旬～7月下旬、8月中旬～9月中旬、年2化、普通。

24. ミヤマカラスアゲハ

Papilio maackii satokei Matsumura

5月中旬～6月中旬、7月下旬～9月上旬、年2化、前種より少ない。

25. ジャコウアゲハ *Byasa alcinous alcinous* Klug

5月中旬～6月上旬、8月、年2化、栃原谷で見えるが、やや少ない。

26. ギフチョウ *Lühdorfia japonica* Leech

4月中旬～5月中旬、年1化、栃原ロッジ付近からハコゲ、川上のハタギリ付近に発生するが多くない。

C. シロチョウ科 Family Pieridae

27. キチョウ

Eurema hecabe mandarina de 1' Orza

6月下旬～9月中旬、9月下旬～5月中旬、年2化、

普通。

28. ツマグロキチョウ

Eurema laeta bethesba Janson

6月中旬～9月上旬、8月下旬～5月中旬、年3～4化、栃原ロッジ付近に多い。

29. ツマキチョウ

Anthocaris scolymus scolymus Butler

4月下旬～5月下旬、年1化、普通。

30. スジボソヤマキチョウ

Gonepteryx mahagura nipponica Verity

栃原ロッジ1♂、18.Ⅷ/1963、少ない。

31. モンキチョウ

Colias erate poliographus Motschulsky

年中、各地に普通。

32. モンシロチョウ

Pieris rapae crucivora Boisduval

4月上旬～10月、年数回発生、低地に普通。

33. スジグロシロチョウ

Pieris melete melete Ménétrières

4月中旬～9月、年2～3化、普通。

34. エゾスジグロシロチョウ

Pieris napi japonica Shirôzu

4月中旬～9月、年2～3化、普通。

D. ウラギンシジミ科 Family Curetidae

35. ウラギンシジミ

Curetis acuta paracuta De Niceville

7～8月、8月下旬～6月上旬、年2化、夏型は稀、秋型は普通。

E. シジミチョウ科 Family Lycaenidae

36. ムラサキシジミ *Arhopala japonica* Murray

7～8月、年1化、少ない。

37. ウラゴマダラシジミ

Artopoetes pryeri Murray

6月中旬～7月下旬、年1化、少ない。

38. アカシジミ *Japonica lutea* Hewitson

6月下旬～7月下旬、年1化、少ない。

39. ミズイロオナガシジミ *Antigius attilia* Bremer

7月上旬～8月上旬、年1化、少ない。

40. ウスイロオナガシジミ *Antigius butleri* Fenton

7月上旬～8月中旬、年1化、千町峠とナガサコで見えるが稀。

41. ウラキシジミ *Ussuriana stygiana* Butler

7月中旬～8月中旬、年1化、倉谷、旗ノ谷、千町峠、ナガソに多く、栗の花に集まるので採集は容易。

42. ウラクロシジミ *Iratsume orsedice* Butler

6月中旬～8月上旬、年1化、栃原谷から倉谷付近に

多く、ウラキンシジミとともに夕方雑木林の上を飛び交う姿は壮観である。

43. ダイセンシジミ

Wagimo signata quercivora Staudinger

7月中旬～9月上旬, 年1化, ゼフィルスで最も雑食性。ハコゲ付近の乾燥した陽当りの良い雑木林に棲息するが稀。夕方樹上を数匹が乱舞するのを見かけることがある。

44. オオミドリシジミ *Favonius orientalis* Murray

6月中旬～8月上旬, 年1化, 少ない。

45. エゾミドリシジミ

Favonius jezoensis Matsumura

7月上旬～8月下旬, 年1化, 午後西日がさす頃から夕方にかけて栃原谷上部から倉谷, 千町峠, 西太郎方面に多い。

46. ジョウザンミドリシジミ

Favonius cognatus jozanus Matsumura

7月中旬～8月下旬, 年1化, 千町峠および上杉にいるが少ない。早朝, またはよく曇った日に樹上で活動するので採集の機会が少ない。前種に比して性質は極めて陰性である。

47. アイノミドリシジミ

Chrysozephyrus aurorinus Oberthür

21.VII/1952, 1♂を旗ノ谷の800mくらいのところで採集した。他に記録がないのは前種同様活動時間が早朝に限られるからである。

48. メスアカミドリシジミ

Chrysozephyrus smaragdinus amoenus Murayama

6月下旬～8月上旬, 年1化, 栃原谷の450m付近から倉谷, 西太郎方面にかけて多い。コウノクラ谷やナガノにもいるが少ない。前種に追い打ちをかけるように活動をはじめ, 11時頃が最盛期で, 昼頃に姿し, 夕方再び少し活動する個体もある。

49. ミドリシジミ

Neozephyrus taxila japonicus Murray

7月中旬～9月下旬, 年1化, 海岸から亜高山帯まで広く分布する本種が, ここに限って比較的高い所に多いのは, 平地性のハンノキがなく, 山地性のヤマハンノキを食餌としているからである。倉谷山, フェバ, 砥ノ峯, 峰山などのヤマハンノキの木立に見付かるが個体数はあまり多くない。

50. ミヤマカラスシジミ

Strymonidia mera Janson

29.VII/1952, 1♂を倉谷山, 段が峯縦走路で採集した記録だけ。

51. トラフシジミ *Rapala arata* Bremer

4月下旬～7月下旬, 7月上旬～8月下旬, 年2化,

普通。

52. コツバメ *Ahlbergia ferrea* Butler

4月上旬～5月中旬, 年1化, 普通。

53. ベンシジミ *Lycaena phlaeas daimio* Seitz

4月下旬～5月下旬, 6月～9月, 10月中旬～11月中旬, おそらく年4化, 普通, 秋は稀。

54. ゴイシジミ *Taraka hamada* Druce

8月～9月に出現するが稀。

55. クロシジミ

Niphanda fusca shijima Fruhstorfer

7月中旬～9月上旬, 年1化, 産地は局限されるが数は大へん多い。カシワおよびコナラに産卵する。

56. ウラナミシジミ *Lampides boeticus* L.

8月～10月, 年1化, 秋, 豆畑で見かけるがあまり多くない。

57. ヤマトシジミ

Zizeeria maha argia Ménétrières

7～10月, 年2～3化, 低地に見るが多くない。

58. シルヴィアシジミ

Zizina otis emelina De L' Orza

1951年9月追上で1♀採集された記録があるだけ。

59. ルリシジミ

Celastrina argiolus ladonides L' Orza

3月中旬～9月下旬, おそらく年3化, 普通, 秋はやや少ない。

60. ツバメシジミ

Everes argiolus hellotia Ménétrières

4月中旬～9月上旬, おそらく年3化, 普通。

F. テングチョウ科 Family Libytheidae

61. テングチョウ

Libythea celtis celtoides Fruhstorfer

年中, 年1化, 普通。

G. マダラチョウ科 Family Danaidae

62. アサギマダラ *Caduga sita nipponica* Moore

7月下旬～8月下旬, ほかに古い個体を5月に2回目撃したことがあるが, これは平地の第1化が飛来したものと考えられるので, 当地ではおそらく年1化, 川上越や栗谷など局部的には極めて多い。

H. タテハチョウ科 Family Nymphalidae

63. メスグロヒョウモン

Damora sagana liane Fruhstorfer

6月中旬, 年1化, 普通。

64. クモガタヒョウモン

Argynnis anadyomene midas Butldr

6月上旬～9月, 年1化, 少ない。

65. ミドリヒョウモン

- Argynnis paphia geisha* Hemming
6月中旬～9月, 年1化, 普通。
66. ウラギンヒョウモン
Fabriciana adippe pallescens Butler
6月下旬～8月下旬, 年1化, 普通。
67. オオウラギンヒョウモン
Fabriciana nerippe Felder et Felder
7月上旬～9月下旬, 年1化, 普通。
68. オオウラギンスジヒョウモン
Argyronome ruslana lysippe Janson
6月下旬～8月下旬, 年1化, 普通。
69. ウラギンスジヒョウモン
Argronome laodice japonica Ménétrières
7月上旬～8月下旬, 年1化少ない。
70. ツマグロヒョウモン *Argyreus hyperbius* L.
7月上旬～8月中旬, 年1化, 晩晴山, 倉谷山, 段ガ
峯頂上などで♂を採集, 栃原ロジおよび上小田で♀を
見かけたが稀。
71. イチモンジチョウ
Limenitis camilla japonica Ménétrières
6月上旬～7月中旬, 年2化, 普通。
72. アサマイチモンジ *Ladoga glorifica* Fruhstorfer
6月上旬～8月下旬, 年2化, 普通。
73. コミスジ
Neptis aceris intermedia W. B. Pryer
4月下旬～9月中旬, 年2化, 普通。
74. ミスジチョウ
Kalkasia philyra excellens Butler
6月中旬～7月下旬, 年1化, 旗ノ谷下部には特に多
い。
75. ヒョウモンモドキ *Melitaea scotosia* Butler
7月中旬～8月上旬, 年1化, 14. VII/1957, 新鮮な
1♂を峰山で採集した。峰山および西段で見かけるが
稀。
76. ウスイロヒョウモンモドキ
Melitaea diamina regama Fruhstorfer
6月下旬～7月下旬, 年1化, わが国では中国山地特
産種で, 大陸の温帯に広く分布する。これを最初に発見
したのは1951年6月29日栃原ロジから西段にかけての
草原で58♂♀を採集した。向井山が現在知られる分布の
東限となっている。その後同年7月下旬に砥ノ峯で,
1954年7月には峰山や千町峠でも発見した。明るい草原
に咲き乱れるオカトラノオ, フジバカマ, ツリガネニン
ジンなどに無数に群がり集ってくる。当地産の表面は大
変黒い部分が多く, 後翅裏面は淡白色, 特に♀におい
ては銀白色を呈した個体が半数を占めるが, 西へ行くに従
って黒斑はだんだん淡くなり, 全体が帯黄色を呈し, 広

島県, 島根県では後翅裏面は濃黄色である。鳥取県東部
でちょうど兵庫県産と中部中国山地産の間と思われる
ものが産する。栃原ロジ付近では, すでに6月25日頃
発生するが, 峰山では標高が高いので7月上旬に発生
し, 7月10日頃が最盛期(これが中国地方で最も一般
的)である。低丘陵地は別として少なくとも山地におい
ては, 白水隆氏の図鑑にある6月25日頃が最盛期とする
のは, 同氏が実際に本種の採集にあまり出かけたことが
ないらしく, 間違いである。

私は1953年6月1日西段においてオミナエシの若葉を
食する終令幼虫を採集して6月20日, 鳥取市で羽化させ
たが, これがわが国における幼生期の最初の発見であっ
た。

77. サカハチチョウ
Araschnia burejana strigosa Butler
4月下旬～7月中旬, 6月中旬～9月上旬, 年2化,
普通。
78. キタテハ *Polygonia c-aureum* L.
6月上旬～7月上旬, 9月上旬～5月, 年2化, 低地
で見るが少ない。
79. シータテハ
Polygonia c-album hamigera Butler
6月中旬～7月中旬, 8月中旬～5月, 年2化, 14.
VIII/1950, 2♂秋型を, 11. VII/1952, 2♂夏型を栃原
谷で採集したのが最初の記録。栃原ロジ付近には少な
いが, 旗ノ谷から西太郎, 川上越およびナガソには比較
的多い。
80. ルリタテハ
Kaniska canace no-japonicum von Siebold
6月中旬～7月下旬, 8月上旬～5月下旬, 年2化,
普通。
81. ヒオドシチョウ
Nymphalis xanthomelas japonica Stichel
6月中旬～5月上旬, 年1化, 普通。
82. ヒメアカタテハ *Vanessa cardui* L.
7月頃見かけるが非常に稀。
83. アカタテハ *Vanessa indica* Herbst
ほとんど年中, 年2化, 普通。
84. スミナガシ
Dichorragia nesimachus nesiotis Fruhstorfer
5月下旬～7月上旬, 7月下旬～8月中旬, 年2化,
普通。
85. ゴマダラチョウ
Hestina japonica Felder et Felder
5月下旬～6月, 7月～8月, 年2化, 低地で見るが
稀。
86. オオムラサキ

Sasakia charonda charonda Hewitson

7月上旬～8月中旬, 年1化, 栃原および上小田に産するが稀。

87. コムラサキ *Apatura ilia substituta* Butler

5月中旬～7月上旬, 7月下旬～9月上旬, 高度に関係なく年2化, 普通。

I. ジャノメチョウ科 Family Satyridae

88. ヒメウラナミジャノメ *Ypthima argus* Butler

5月中旬～7月上旬, 8月上旬～9月上旬, 年2化, 普通。

89. ウラナミジャノメ

Ypthima motschulskyi Bremer et Grey

7月, 年1化, 新田の放牧場に多い。

90. ジャノメチョウ

Minois dryas bipunctatus Motschulsky

7月下旬～10月上旬, 年1化, 普通。

91. キマダラヒカゲ

Noepe goschkevitschii Ménétrières

4月下旬～7月中旬, 7月上旬～9月上旬, 年2化, 普通。

92. オオヒカゲ

Aranda schrenckii menalcas Fruhstorfer

7月下旬～9月中旬, 年1化, 稀。

93. ヒメジャノメ

Mycalesis gotama fulginia Fruhstorfer

6月, 8月, 年2化, 少ない。

94. コジャノメ

Mycalesis francisca perdiccas Hewitson

5月～6月, 8月中旬～9月上旬, 年2化, 普通。

95. ヒメキマダラヒカゲ

Harima callipteris callipteris Butler

5月下旬～7月下旬, 8月上旬～9月下旬, 年2化, 600m以上では普通。秋冷とともに低地へ降りてきて, 栃原ロッジ付近でも少なくない。棲息地は温帯以上であるが, 普通ミズナラの下限地帯から現われる。特に千町峠付近に多い。

96. ヒカゲチョウ *Kirrodesa sicelis* Hewitson

5月下旬～6月, 8月～9月, 年2化, 少ない。

97. クロヒカゲ *Lethe diana* Butler

5月下旬～7月上旬, 8月上旬～9月下旬, 年2化, 普通。

98. ヒメヒカゲ

Coenonympha oedippus annulifer Butler

7月上旬～8月上旬, 年1化, 栃原谷, 西段, 東段, 千町峠, 砥ノ峯, 峰山などの草原に極めて普通。

99. コノマチョウ (クロコノマチョウ)

Melanitis phedima oitensis Matsumura

10月, 旗ノ谷で見かけるが稀。

VI. 播州高原に関する文献

1. 西村公夫 (1951): ホンチャパネセセリの新産地/蝶と蛾Vol. 2, Pt. 2, p.12
2. 西村公夫 (1951): 関西のシータテハ/蝶と蛾Vol. 2, Pt. 2, p.12
3. 西村公夫 (1951): スジグロチャパネセセリの産卵習性/蝶と蛾Vol. 2, Pt. 4, p.29
4. 西村公夫 (1951): 栃原谷/中国昆虫学会々報Vol. 1, No. 2, p.1～12
5. 西村公夫 (1952): 段ガ峯山塊の昆虫類について(1)/中国昆虫学会々報 Vol. 2, No. 2, p.39～44
6. 西村公夫 (1954): 藤ガ棚牧場の食糞性黄金虫について, 第2報/兵庫生物Vol. 2, No. 4～5, p.225, 250
7. 西村公夫 (1954): ウスイロヒョウモンモドキ (生態と分布)/M.D.K. News別冊, p.1～6
8. 西村公夫 (1955): ミドリシジミ類の陰陽性に関する研究/M.D.K. News別冊, p.1～9
9. 西村公夫 (1956): 西の霧ガ峯, 段ガ峯高原/ハイカー13号, p.25～26
10. 西村公夫 (1959): 峯山高原ハイキングコース/登山6号, p.27～29
11. 西村公夫 (1959): 関西スキー場案内/登山7号, p.41～67
12. 西村公夫 (1961): 段ガ峯/山と高原292号, p.110～112
13. 西村公夫 (1961): 花のコースを訪ねて/山と高原297号, p.55～57
14. 西村公夫 (1961): 播州高原/山と高原301号, p.32～34
15. 西村公夫 (1961): 播州高原/山と 溪谷272号, p.75～77
16. 西村公夫 (1962): 花のコース/山と高原 308号, p.86～92
17. 西村公夫 (1962): 中国の山と谷 (朋文堂, マンテンガイドブックシリーズ44)/桑原良敏, 上島敬一 共著
18. 西村公夫 (1962): 大阪周辺の山々, p.59～84, (朋文堂)/共著
19. 山本広一, 吉阪道雄 (1958): 兵庫県産蝶類目録(1)/兵庫生物Vol. 3, No. 4, p.228
20. 山本広一, 吉阪道雄 (1959): 兵庫県産蝶類目録(2)/兵庫生物Vol. 3, No. 5, p.358, 364
21. 山本広一, 吉阪道雄 (1960): 兵庫県産蝶類目録(3)/兵庫生物Vol. 4, No. 1, p.37～45
22. 天子山人 (1960): 山女魚, モノローグ/釣の友7月号, p.45～48
23. 天子山人 (1962): あまご, モノローグ (No.18)/釣の友12月号, p.44～46